

北海道および東北地方北部のザトウムシ類相

鈴木正将(広島市), 鶴崎展巨(北大・理・動物)

Opilionid fauna of Hokkaido and the northern-most area of Honshu

SEISHO SUZUKI, NOBUO TSURUSAKI

これまで他地域と比べて研究の不十分であった北海道と東北地方のザトウムシ類について、主として1975年以来得られた多くの標本をもとに分類学的検討をおこない、北海道15種、東北地方北部19種の生息を確認した。

両地域を比較すると道内の種の大部分が本州と共通であるのに対し、青森県を北限とし道内から知られないものは6種(うちGagrellinae亜科3種)を数える。この事実は第4紀における気候の変遷と海峡形成の時期からみてよく納得できる。また両地域にまたがって分布する種のうち、今回 *Sabacon makinoi* Suzuki の札幌と青森浅虫の材料で核型を調べたところ染色体数が両者で全く異なることがわかった。したがって本種は両地域間で種分化を起こしているとみなされるが、他の多くの種はとくに目った変異を示していない。関東・中部地方以西で著しい地理変異・分化を示す *Gagrellula* 属や *Leiobunum* 属のザトウムシについてみても、東北地方以北では変異に乏しい。これらの点も本地域に分布するザトウムシ類の一つの特徴になっている。

なお今回、北海道苫小牧において日本未記録種 *Phalangium opilio* Linnaeusの生息が確認された。本種はヨーロッパ・北米・ニュージーランドに分布するが、あの二地域のものはヨーロッパからの移入種とみなされている。これまでユーラシア東部からの記録が全くないことや、今回の採集地点の状況などを考え合わせると、北海道のものも牧草などに伴ってヨーロッパか他の生息地から人為的に導入された可能性が大きい。

触穎類(*Pselaphognatha*)の分類学上の標徴としての歩肢感覺棘毛について石井 清(独協医大・生物), 山口恵一郎(同・総研)
永井伸一(同・生物)On the setae of legs as diagnostic character of *Pselaphognatha* (Diplopoda)

KIYOSHI ISHII, KEIICHIRO YAMAGUCHI, SHIN-ICHI NAGAI

触穎類(*Pselaphognatha*)は体に多数の特殊な剛毛をもったヤステ類である。従来は、主に剛毛の形状に分類学的標徴を求めていたが、熟練を要するため研究が遅れている。本類は13対の歩肢をもち、各関節に特有な形をした棘毛が生えている。この棘毛の配列が本類を分類する上で重要な標徴となり得るかどうかという観点から、本州で既に知られている *Monographis* 属の3亜種(*M. takakuwai takakuwai*, *M. t. nigricans*, *M. t. kinutensis*), 沖縄と小笠原で採集した未記載の属の一種(Type 1とする)および本州の房総半島で採集した日本未記録の属である *Polyxenus* の未記載の一種(Type 2とする)について検討を行なった。本類は複雑な形態をするためにSEMを用いて観察をした。棘毛配列はCx, Tr, P, F, Ti, Taの順に記した。その結果 *M. t. takakuwai*: 1-3, 1, 1, 1-2, 1, *M. t. nigricans*: 1-4, 1, 0, 1, 1(ただし第13歩肢Cxは棘毛をもたない), *M. t. kinutensis*: 1-3, 1, 1, 0, 0, 1の棘毛配列を示した。*M. t. takakuwai*のTiは第1, 13歩肢に1本ずつ生じ、それ以外は2本ずつ生じている。これら3亜種のPには小さな側棘がある。Type 1: 3-7, 1-2, 1-2, 1-2, 0, 1となり *Monographis* 属に比べて棘毛数も多い。Type 2: 0(III-XIII), 1, 1, 0, 1, 1(ただしCxにおいて第1歩肢は1本、第2歩肢は2本の棘毛をもつ)の配列をなす。Type 1, 2ともにPに側毛をもたない。以上の事から種間、属間において棘毛配列のパターンが決まっていることが判明した。

よって歩肢の棘毛の配列は、本類の分類学上重要な標徴となり得る。